



にじのはし幼稚園 園だより



令和5年1月号
港区立にじのはし幼稚園
園長 石川典子

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

本園は、一人ひとりの基本的人権を尊重し、発達の特性に応じた個別最適な学びを実現させ、教育目標の達成を目指した教育活動を推進し、生きる力の基礎を培います。

- ① 教師の指導を幼児一人ひとりに応じて行います。
 - ② 少人数保育における教育内容の充実を図ります。
 - ③ 教材や行事を工夫し、心動く体験へとつなげ豊かな学びを保障します。
- (幼稚園経営計画 4 経営の重点の今年度の主な取り組み より)

園内研究会の講師、元東京都教職員研修センター研修指導員の大竹節子先生から教えていただいた詩です。是非、ご一読いただき、考えを巡らせていただければ幸いです。

『冗談じゃない。百のものはここにある』

子どもは 百のものでつくられている。
子どもは 百の言葉を 百の手を 百の思いを 百の考え方を 百の遊び方や話し方を持っている。
百、何もかもが百。
聞き方も 驚き方も 愛し方も 理解し歌うときの喜びも百。
発見すべき世界も百。発明すべき世界も百。夢見る世界も百。
子どもは百の言葉を持っている。(ほかにも、いろいろ百、百、百)
けれども、その九十九は奪われる。
学校も文化も頭と身体を分けこう教える。
手を使わないで考えなさい。頭を使わないでやりなさい。話をしないで聴きなさい。
楽しまないで理解しなさい。
愛したり驚いたりするのはイースターとクリスマスのときだけにしなさい。
こうも教える。
すでにある世界を発見しなさい。そして百の世界から九十九を奪ってしまう。
こうも教える。
遊びと仕事 現実とファンタジー 科学と発明 空と大地 理性と夢
これらはみんな ともにあることは できないんだよと。
つまり、こう教える。百のものはないと。
子どもは答える。冗談じゃない。百のものはここにある。

(ローリス・マラグッツィ (Loris Malaguzzi) / 作 佐藤学 / 訳)

子どもが何かに縛られているとしたら、手足は動かしにくいし、物を見るのも大変です。身動きすらとれないかもしれません。もし大人が子どもを縛っているとしたら、それをほどこいていかななくてははいけません。我々大人が気を付けることは、子どもに価値観やすべきことを一方的に教え込まないということです。子どものもつ可能性や感性を奪うことにつながるからです。

今年度最後の学期に、子どもたちが進学・進級の期待感を胸に、「卯年」の象徴である「飛躍」ができるよう、更に一人ひとりを大切にしたい教育の充実に努めます。